

# ロシア貴族とウサージバ：

## A・オレーニンと別邸プリューチノ（1）

坂内知子

### 1. 貴族とウサージバ

帝政期ロシアは貴族の国であった——革命前のロシアの特徴をとらえたよく知られた表現である。ロシア貴族は17世紀以前のボヤーレ（大貴族：モスクワ大公国以前からの諸公、彼らを取り巻く土豪・武将、及び廷臣に発するもの）に由来するものと、18世紀以降の、ピョートル一世が定めた官等表の定めるところによるドヴォリャンストヴォに大別される。後者は貴族に国家勤務を課し、職務の位階を官等として貴族の順列とするものであった。このシステムは門地にこだわらず能力があり、国家に奉仕する者に開かれており、庶民から新興貴族を生み出すシステムでもあった。また、諸公の末裔としての由緒を誇る古い大貴族にしても、国家勤務に就くことによって官等表に組み込まれ、次第にドヴォリャンストヴォと一体化していった<sup>(1)</sup>。

それまでロシアには公爵（公：クニャシ）というタイトルしかなかったが、ピョートルはそれに加えて、伯爵（グラフ）、男爵（バロン）という爵位も定めた。しかし、この官僚貴族制度では爵位を授与されるのは特別のことであり、官等表高位の職に就くことで貴族（19世紀では九等官で

---

(1) ロシアの貴族制に関しては Порай-Кошниц, Романович-Славятинский (2003), Яковкина (2002), Миронов (1999) を参照。

一代貴族、武官は六等官で、文官は四等官で世襲貴族)に列せられたものがほとんどで、その数も膨大なものであった。したがって、19世紀には百万人いたとも言われるロシア貴族は、ほんの千人ほどしかないイギリスの貴族などと区別して士族と訳されることもある<sup>(2)</sup>。

領地と農奴を有する貴族はこうして国家勤務が義務づけられていたが、1762年ピョートル三世によって貴族の勤務が自由となり、さらにエカテリーナ二世が1785年に貴族へ「特権認可状」を与えて、貴族の領地、農奴を私有財産として保証したことにより、ロシアの貴族層はその全盛期を迎えることになる。

古来、ロシア貴族の住む屋敷はウサージバと呼ばれてきた。それは領地内の領主屋敷とか田舎屋敷とか呼びうる、主人用の住宅、使用人用付属建物、家事家政用施設、農作業用建物、庭、菜園などからなる、家政用生産設備を備えた個別の主家敷地領域を意味した。領地内の畑地、牧地、村、百姓家集落とは異質の世界を形成していた<sup>(3)</sup>。

エカテリーナ二世によって私有領地が法的に保全されてより、貴族たちは安心して勤務をやめて領地に帰ることができた。当然のことながら、ロシア全土に様々な規模、個性のウサージバが営まれ、貴族の生活の主舞台

---

(2) Ливен (2000).

(3) ウサージバに関しては、近年、特にソ連崩壊後に、数多くの注目すべき研究が発表され、現在に至っている。革命前のウサージバ研究ならびに近年の研究動向に関しては、坂内徳明「ロシアのウサージバ(貴族屋敷)文化研究序説(一)」「一橋大学研究年報 人文科学研究」41(2004年)を参照。また、ウサージバに関する書誌として現時点ではほぼ完璧な仕事は、Г. Д. Злочевский, Русская усадьба. Историко-библиографический обзор литературы (1787-1992). М., 2003; Его же, Старинные усадьбы и дачи Подмосковья. Библиографический указатель (1992-2006). М., 2008.

となったのである。

17世紀までのロシア古来のウサージバは、皇帝、名門大貴族のものといえども、簡素な実用主義的な構成の屋敷構えで、主人と召使たちの地味な住宅棟、家政用の諸設備に菜園、果樹園、鳥獣小屋、つつましやかな庭と敷地の境界をつくる林苑などからなっていた<sup>(4)</sup>。

ピョートル一世はヨーロッパの諸王家に倣って、帝室のウサージバを離宮にする。主館は豪華な宮殿となり、宮殿の回りには装飾としての大整形式庭園が出現した。こうして皇帝がモデルを示すことにより、ロシアのウサージバは実用経済的な意味にもまして遊樂的、権力・財力誇示的な意味合いを強くしていった。

皇帝専制国家の支配階級である貴族は、エカテリーナ二世時代以降、自己の領地に居る限り、皇帝権力の干渉をも恐れることなくほぼ完璧な自由・専横を享受することができた。彼らはそのベースとしてのウサージバを街道から離れた孤島のようなところに好んで設営した。ウサージバは貴族の王国であり、砦であった。それは豊かな貴族生活のシンボルとも見なされ、19世紀後半にはブルジョア層の憧れるものともなっていた。

貴族たちは国家勤務から解放される権利を有していたとはいえ、勤務で与えられる官位の権威を無視し、その俸給に頼らず生活できる家はほんの僅かしかなかった。ほとんどの貴族がある年限は勤務の経験を持ち、その間、領地と勤務地を行き来する生活をしていた。冬の間は首都（ペテルブルグ、モスクワ）で暮らし、夏になると家族と共に田舎の領地へ行くというのが一般的な貴族の生活パターンであった<sup>(5)</sup>。

---

(4) ロシア中世に始まるあるウサージバの展開と消長に関しては、坂内知子「ロシア中世庭園の終焉——帝室イズマイロヴォ領地屋敷の変遷」『人文・自然研究 第4号』（一橋大学 大学教育研究開発センター、2010年）。

(5) ロシア貴族の生活に関しては、Лютман (1994)。

18世紀90年代、ある中クラスの貴族が新たにウサージバの設営を試みる。このウサージバはペテルブルグ郊外にその姿を現し、所有者一家の夏の生活の場となり、友人・客人として多くの文化人を迎え、彼らの交流の場となった。文化・芸術サロンとして大きな求心力を誇った最盛期を経て、この貴族の別邸は経済的に立ち行かなくなり、19世紀40年代には売却され、ウサージバとしての歴史を閉じた。本論文はオレーニン家所有のこのウサージバ「プリューチノ」の成り立ちと約半世紀のその消長を追い、ウサージバからロシアの貴族文化を考察する研究の最初の部分となるものである<sup>(6)</sup>。

## 2. オレーニン家の人々

プリューチノをつくったオレーニン家の当主、アレクセイ・ニコラエヴィチ・オレーニン（1763—1843）はエカテリーナ二世の啓蒙政策によって育て上げられた人材であった。ドイツ留学から帰って軍人として勤めた後、文官に転じ、経済・文化官僚として政府中枢で多くの職責を果たし、目覚ましい活躍をした。高度なヨーロッパの教養をそなえ、学者としてはアカデミー会員ともなり、作家、芸術家としても仕事を残しているが、なによりも現在のロシア国立図書館（サンクト・ペテルブルグ）の前身である、帝立公共図書館の第一代館長を30年余り勤めた人物として知られている<sup>(7)</sup>。

---

(6) ペテルブルグ郊外のウサージバであるプリューチノについては、アガマリヤンの編纂になる780ページにも及ぶすぐれたアンソロジー *Приютинно* (2008) がある。

(7) オレーニンに関する伝記としては、網羅的かつ周到な最新の成果として、*Файбисович* (2006) がある他、*Тимофеев* (1983)、*Голубева* (1988)、(1997)、また、アメリカ人 *Stuart* (1986) の仕事もある。文学活動の概略に関しては『ロシア作家事典 1800-1917』（第3巻、M., 1994）、彼の公的側面、特に官等をはじめとした役職・肩書きについては、*Шилов* (2002) を参照。ただし、『文学小百科事典』には項目がなく、ブロックハ

歴史家クリュチェフスキイはオレーニンを、「素晴らしい教養をそなえた人、芸術と文学の熱狂的愛好者、才能ゆたかな画家、繊細な芸術的感性と該博な知識を持ち、古き祖国を愛し、祖国の生み出した才能を庇護した……職務と友情に身を捧げた客好きの主人……」<sup>(8)</sup>と評している。

オレーニン家は先祖を、A・H・オレーニンより五代前のパルフェニイ（—1667）までしか文献的にたどることができない、さほど古いとは言えない中流貴族の流れである。しかし、ロシア貴族の家のご多聞に洩れず、オレーニン（アレーニン）家にも家の起源にまつわる数々の言い伝えや伝説が伝わっていた。王女を背に乗せた熊が描かれている家の紋章から、熊に庇護されたアイルランドの王女の末裔説や、イワン雷帝に迫害されたという言い伝えから、スモレンスクの公やさらにはアレクサンドル・ネフスキ大公まで遡及して、公家の流れをくむものとする説さえある。また、シベリア開発の英雄である、エルマークが一族から出たとする言い伝えもあり、エルマークはオレーニン家の人々から特別の敬意を払われていた<sup>(9)</sup>。

アレクセイ・オレーニンは国家評議会に勤めるまで「アレーニン」と署名していたが、「美的見地より」オレーニンと書くことにしたという。この姓はオレーニ（олень＝鹿、アレーニと発音する）に発するという考えである。一族の皆は賢明な彼の決めたことだからと、従うことになったという<sup>(10)</sup>。動物名からできた姓がロシアには多いのである。

アレクセイの父、ニコライ・ヤコヴレヴィチ（1744—1802）はエリザヴェータ女帝時代にスモレンスク地方の田舎貴族の息子として子供時代を過

---

ウス百科辞典（1897）の記述は簡単で、しかも名前に間違いがある。

(8) Ключевский (1983, 130).

(9) Тимофеев (2004, 11). ベロルーシ、ポーランドに類似紋章が見られるという。

(10) Голубева (1997, 7-8).

ごした。幼時に父を亡くし、12歳で母を失い、全くの孤児となったが、その時には兄のドミトリイと共にモスクワ大学付属貴族ギムナジウムに在籍していた。モスクワ大学ならびに付属ギムナジウム（モスクワ大学に先立って1755年4月26日開校）の開設に大きく寄与し、モスクワ大学総監となったイワン・シュワロフはオレーニン兄弟の父の従兄弟イワン・イワノヴィチ・オレーニンの妻の兄弟にあっていた。

大学開設当時、貴族の未成年子弟を親元から離して教育機関に入れることは国家の大問題であった。若者たちは審査を受けて大学に入れられるが、審査を受けない者は兵士・水兵にしかねないとの命令を1756年に元老院が出している。兄のドミトリイは学業不振で3年で放校となり、軍務に就かされたが、弟のニコライは学業を続けながらプレオブラジェンスキイ近衛連隊に登録され、しかも在学中に結婚した。

結婚相手はセミヨン・フョードロヴィチ・ヴォルコンスキイ公爵の三女アンナ（1737—1808）であった。この時、アンナは25歳で夫より7歳年長であった。妻の実家は紛れもない名家で、オレーニン家が百年少しの由緒しかないのに対し、アンナ・ヴォルコンスカヤはロシア国家の始祖リューリクから数えて25代目の子孫とされていた。

家格の違いばかりでなく、結婚を取り決めた際に夫となる若者はまだ士官にもなっていないのに対し、妻の父は陸軍大将級の位階を有していたのである。この父親はなぜか娘の婚約、結婚について異例の性急さでことを運んだのであった。

名門公爵家の令嬢がまだ学業にある年下の取るに足りない田舎貴族のもとへ多額の持参金を持って嫁いできたことの不自然さは、第一子（第二子とも？）アレクセイの出生についての異説の生じる素地ともなり得たと思われる<sup>(11)</sup>。ニコライとアンナの間には17人の子供が生まれたが、アレクセイと二人の妹、ワルワラ（1774—1833）とソフィア（1775—1838）の

---

(11) Голубева (1997, 9. 初出は Русская старина, 1899. Т. 100, No. 11, с. 269).

3人しか成人しなかったという<sup>(12)</sup>。

1762年、結婚の後ニコライ・オレーニンはギムナジウムを退学し、近衛軍プレオブラジェンスキ連隊の勤務となったが、間もなく彼は領地経営に専心するため、軍務から離れたようである。1761年に兄のドミトリイが没し、妹が相続した領地を妻の持参金で買い取ったので、先代からの全世襲領地の地主となったのである。所有する農奴は1320人であった。

しかし、田舎の引退生活は一年も続かず、1764年、ニコライは軍務に復帰するが、今度はきわめて特権的な近衛騎馬連隊に騎兵少尉として勤務し、その後とんとん拍子に出世してゆく。1777年、ニコライは20年（ギムナジウム在学中の1757年より軍籍に入っている）の規定軍務を勤めあげ、病気を理由に退役したときは陸軍大佐であった。その後はリャザン県のカシモフ郡サラウル村で過ごし、カシモフ郡の貴族団長に選ばれている。妻の実家のおかげで異例の出世をとげたニコライ・オレーニンは妻よりも早く没したが、家中や領地の農民の間ではその温和さと善良さが伝えられていたという<sup>(13)</sup>。

### 3. 子供時代のアレクセイ・オレーニン

ニコライ・ヤコヴレヴィチ・オレーニン家の唯一生き残った息子としてアレクセイは育てられた。しかし、両親ともに一人息子のアレクセイに対して冷たかったという。二人の妹はアレクセイとは10歳以上の歳の差があったため家庭生活を共にすることもなく、彼の10歳までの生活を伝えるものはほとんど残っておらず、どこで過ごしたのかもさだかではない。この時期、父は近衛騎馬隊勤務でほとんどペテルブルグに滞在していたようである。彼は母とモスクワの母の家で過ごし、夏には母が家庭教師に連

---

(12) Оленина (1999, 228-229).

(13) Файбисович (2006, 15), Оленина (1999, 228).

れられて田舎の領地へ行っていたのだろう。

溫柔な祖父に反して祖母は尊大で偏屈な性格であったと孫のアンナは言う。「祖父はもっぱら強情な性格の祖母と衝突しないようにしていた」<sup>(14)</sup>と。偏屈で奇矯な性格はヴォルコンスキイ家の人々には共通のものだったようで、アンナ・セミヨーノヴナの弟グリゴリイ・セミヨーノヴィチの常識外れの奇抜な振る舞いに彼女はおかしきよりも恐怖を感じていたこと、姉妹たちのなかでも祖母のアンナとその姉のマリヤは変人ぶりではグリゴリイに引けをとらなかったと述べている。彼らの父のセミヨン・ヴォルコンスキイ将軍も軍では知られた変人で、アンナをオレーニン家に嫁がせたことも彼の性格が大きく作用していたのかもしれない。アレクセイ・オレーニン家ではヴォルコンスキイ家の人々を揶揄して「ヴォルホンシチナ」と呼んでいた。

アレクセイは10歳まで家庭で教育を受けたが、彼自身が後年述べているようにそれは決して進歩的なものではなかった。「私は自由主義とか博愛主義とかにまったく無縁の両親のもとで育てられ、彼らにはほんの幼いころから『どのコオロギも自分の居場所をわきまえている（身の程を知れ）』という古いロシアの諺をさんざん言って聞かせられたものだ」。また、アラクチャーエフへの手紙の中でも彼は自分が子供時代に受けた教育はきわめて慎ましいもので、文字教本と祈禱書、正教聖歌集を学んだことを書いている<sup>(15)</sup>。

この時代、貴族の子弟が文字を学び、祈禱書を読み始めるころには、家庭教師が雇い入れられるのが常であった。オレーニン家も子供に家庭教師を付けたにちががなく、1774年にアレクセイがペテルブルグへ出て来て、侍従幼年学校へ入る時にはフランス人家庭教師のデ・レストラと、ポーラ

---

(14) Оленина (1999, 228).

(15) Файбисович (2006, 25. 初出は Русская старина, 1875, Октябрь, с. 287).



ンドの小貴族出身のイオシフ・シェルヴィンスキという教育監督係がついていた。さらに、身の回りの世話をするために、農奴の小間使いが一人つけられていた。

家庭教師たちについてのアレクセイの後年の思い出は喜ばしいものではなく、娘アンナは父の話から、デ・レストラを教養のない軽薄な人物ととらえている<sup>(16)</sup>。中小貴族の雇える外国人家庭教師のレヴェルは低いものだった。ヨーロッパから教師にふさわしい人間を招くことが出来るのはよほどの富裕な大貴族で、たいていはロシアに流れてきた西ヨーロッパ人なら誰でも構わず雇い入れることで満足していた<sup>(17)</sup>。

アレクセイ・オレーニンがペテルブルグに出て来て、侍従幼年学校に入った経緯については、これまで母方の遠縁に当たるエカテリーナ・ダシコヴァ公爵夫人のもとにあずけられ、彼女の家でエカテリーナ二世の目に止まったとする説が広く認められてきたが、アレクセイ・オレーニンの評伝を書いたB・ファイビソヴィチは否定的である。この時期、ダシコヴァ公爵夫人はエカテリーナ二世との関係が陰悪で、失寵寸前であったからである。むしろ、母親の実家ヴォルコンスキイ家の人脈や、アレクセイの実父と目される人物の影響力があつたのではないかと言う<sup>(18)</sup>。

アレクセイが入った侍従幼年学校はエリザヴェータ・ペトロヴナ女帝のもとで1759年に設立された軍教育機関であるが、宮廷に出仕するための教育を施し、侍従として働かせる、宮廷付属の学校であつた<sup>(19)</sup>。生徒たちは宮廷出仕により給料も与えられていた。娘アンナの回想によると、アレクセイは小さい頃より軍務につくことを願っていたが、息子の宮中勤務

---

(16) Оленина (1999, 229-230).

(17) 18—19世紀ロシアの家庭教師をめぐる文化史に関する最新の成果は、O. Ю. Солодянкина, *Иностранные гувернантки в России (вторая половина XVIII—первая половина XIX века)*. М., 2007.

(18) Файбисович (2006, 26-31).

(19) *Русский военно-исторический словарь*. М., 2001. С. 439.

を望む母親によって希望を曲げられたのだと言う<sup>(20)</sup>。

貴族陸軍幼年学校は4年制で、授業は7時半から始まった。1年では読み書きと初歩的な算数を学び、2年ではギリシャ語、ラテン語、ドイツ語、フランス語、文法、歴史、地理、算数、代数を学んだ。3年では2年の科目に加えて、幾何、鉱物学、フェンシングが加わった。4年では学科がさらに高度な内容のものとなり、築城学の講義があった。どの学年でもダンスと絵画を学び、宮廷用馬場で馬術が教えられた<sup>(21)</sup>。

侍従幼年学校で学んでいた12歳の侍従アレクセイ・オレーニンは1775年に自分の書籍目録“Catalogue des livres de monsieur Alexis Alenin en 1775”を作成し、今日に残っている。これは18世紀70年代、ロシアにおいて啓蒙主義たけなわのころの児童の読書の実態や傾向を示す貴重な資料であることは言うまでもない。カタログはタイトルだけでなく、すべてフランス語で書かれているが、まず、30項目のフランス語の本、ついで、19項目のロシア語のものと、全部で49の項目からなっている。И・Ф・マルトウイノフはこの文庫の内容を、内容の分からない2項目をのぞく47項目について次のように分類している<sup>(22)</sup>。1) 文学—17項目、2) 文法・辞書—7項目、3) 軍事—6項目、4) 歴史—6項目、5) 教育・児童書—4項目、6) 文献学・美学—2項目、7) 自然科学・精密科学—2項目、8) 哲学・宗教—2項目、9) 地理—1項目。1項目1冊のこともあるが、1項目でもヴォルテール全集は17巻、モリエール全集は6巻であり、全部で95冊の目録となっている。

侍従幼年学校の狭い学寮に暮らす侍従がこのように大量の書籍を所有できるはずはないと、ファイビソヴィチはこのカタログに問題を投げかけているが、物理的な所有でなくとも、アレクセイ少年の読書歴、または読書

---

(20) Оленина (1999, 229).

(21) Файбисович (2006, 29. 初出は Д. М. Левшин, Пажеский Его Императорского Величества корпус за сто лет. Т. 1, с. 150–151).

(22) Мартынов (1977).

計画として読んで、この人物の知的能力のスケールと知的好奇心の傾向に気づかざるを得ない。

#### 4. ドイツ留学

オレーニンは6年ほどの年月を侍従幼年学校で過ごしたのち、1780年エカテリーナ二世の命令で「サクソニヤ、ドレスデン市へ、当地の砲術学校で軍事技術と文芸諸学問を修得するため」<sup>(23)</sup>送られた。

娘アンナの回想によると、アレクセイがドレスデンに派遣されるようになった経緯は次のごとくである。「侍従幼年学校に学んで5年たったころ、アレクセイに初めてのエカテリーナ二世の当番侍従としての番がまわってきた。その時、女帝は彼にどのような立身を望んでいるかと尋ねられた。それに対し、彼ははっきりと軍務を希望していることを言い、砲術を学ぶために、当時砲術学において世界で一番進んでいると言われていたドレスデンへ行かせて欲しいと願った。彼の懇願をよしとしたエカテリーナ二世は自分が費用を出して彼をドレスデンに派遣した。」<sup>(24)</sup>

かくしてアレクセイ・オレーニン少年は母によって拒まれ続けていた小さい頃からの軍隊勤務の夢を実現するため、自らの手で突破口を切り開いたようである。

オレーニンが砲術を学ぶこととなったドレスデンの砲術学校（die Artillerieschule）は1768年にフリードリヒ・アウグスト三世選帝侯の摂政クサヴェリイ公が創設した教育砲兵中隊であった。しかし、彼のもう一つの留学目的である文芸諸学問はここでは学べなかった。それゆえ、彼がドイツ滞在中にストラスブルグ大学でも学んだという説もある<sup>(25)</sup>。

---

(23) Русская старина, 1875, Октябрь, с. 280.

(24) Оленина (1999, 229-230).

(25) Русская старина, 1875, Октябрь, с. 280.

オレーニンは5年余のドイツ留学ののち、砲術学以外に、文学、芸術、歴史、考古学、古文書学と多岐にわたる教養と絵画技術を身につけてロシアに帰っているのだが、彼はどこでこれらの学問に接し、学ぶことができたのであろうか。オレーニンのドレスデン滞在中の行動を直接示す記録はほとんど残っておらず、この時代のドレスデンの状況から推し量るのみであるが、興味深い時代像が浮かびあがってくる。

オレーニンの上の娘のワルワラは、彼がドレスデンで遠い親戚にあたるペロセリスキイ公爵の庇護を受けたと言う<sup>(26)</sup>。

アレクサンドル・ミハイロヴィチ・ペロセリスキイ（後にペロセリスキイ＝ペロゼルスキイ、1752—1809）公爵は母国で大貴族として相応しい最上の教育を施されたのち、ドイツでイエズス会の学校に学び、ロンドンに渡ってさらに高度の教育を受けた<sup>(27)</sup>。1775年から1778年にかけてフランス、イタリアを巡り、文学、音楽、芸術の研究を深め、この頃から芸術コレクターとしての活動を始めた。彼のコレクションはのちにロシア有数のものとなっている。

ペロセリスキイ公爵はルソー、ヴォルテール、ボマルシェ、ラアルプらと個人的に交友関係を結び、1775年にはヴォルテールへ宛てた書簡詩を出版して、ヴォルテールからそのフランス語を賞讃された。イタリアではガルツピなど音楽家たちに交わり、1778年にハーグで「イタリア音楽について」《De la musique en Italie》という小冊子を出して、当時のイタリア音楽界の論争にも加わっている。このロシア人による初めてのイタリア音楽についての著作は彼の名をヨーロッパで有名なものとした。

美丈夫で人をそらさない魅力を持つペロセリスキイ公爵は西ヨーロッパの友人たちから「モスクワのアポロン」と呼ばれたという<sup>(28)</sup>。

---

(26) Файбисович (2006, 37).

(27) ペロセリスキイに関しては、Российский гуманитарный энциклопедический словарь. В трех томах. Т. 1, СПб., 2002. С. 184-185.

(28) Файбисович (2006, 37).

反対にアレクセイ・オレーニンは外貌に恵まれなかった。目立って背が低く、鷲鼻が特徴の顔立ちをしていた。オレーニン家の人たちは容姿に秀でず、妹二人も美貌ではなく、生涯未婚であった。彼は1802年の父の死の後、妹たちを貴族女学院へ入学させ、遺産分割でも負債は自分が引き受けて、法で決められたものより多くを彼女たちに与えている。

1779年、ペロセリスキイ公爵はエカテリーナ二世によってサクソニア（ザクセン）宮廷への公使に任命された。1780年にアレクセイがドレスデンに現われたとき、公爵はまだ30歳まえの若さであり、その庇護の下に入ったオレーニンが心服し、全面的な影響を受けたことは想像に難くない。ファイビツヴィチはペロセリスキイ公爵邸のサロンこそアレクセイ・オレーニンの「大学」であったと言う<sup>(29)</sup>。

1780年頃、ドレスデンはドイツ7年戦争の戦禍もまだ癒えきらず、人口も減少してペテルブルグの六分の一ほどの小都市となっていた。しかし、ザクセン選帝侯の居城のあるこの都市は、ドイツの文化的首都として19世紀においてもヨーロッパで確固たる名声を博していた。特に芸術の分野での声望は高く、ドイツのヴェネツィアとも呼ばれ、その核としてあったのが王宮ツヴィンガー城のなかにあった美術ギャラリーであった。16世紀半ばにつくられたこのギャラリーにはラファエロ、コレッジョ、ミケランジェロ、ヴェロネーゼ、ティントレット、バッサーノ、プッサン、ジョルダノー、ローザ、ルーベンス、ヴァン・ダイクなどの絵画が集められており、ドレスデンの第一に誇る名所になっていた。

10年ほど遅くドレスデンを訪れたカラムジンは『ロシア人旅行者の手紙』のなかで、まず美術ギャラリーを、次に、世界に類を見ない宝石コレクションである「緑の宝庫」を見るべきところとして紹介し、三番目に選

---

(29) Файбисович (2006, 37).

帝侯の大図書館をあげている<sup>(30)</sup>。

おそらく、オレーニンにとって大図書館は最も重要な場所であり、ここで古代軍事用語の歴史文献探索に励んでいたのだろう。また、ペロセリスキイ公爵は芸術アカデミーも紹介したはずであり、オレーニンは絵画、彫刻、建築などの分野にその才能を伸ばしてゆくことができた。

オレーニンの芸術的嗜好がドイツ啓蒙主義の巨人たちに影響されたことは明確にわかる。最も大きな影響を与えたヴィンケルマンはレッシングと共に彼にギリシア・ローマの古典美への傾倒をもたらした。オレーニンのドレスデン滞在中まだ存命であった哲学者のヘルダーは彼のナショナルな歴史的指向を育てたと言われる<sup>(31)</sup>。青年期の5年余をすごしたドレスデンでの時間はオレーニンの世界観形成に決定的な役割を果たしたであろう。

アンナの回想記によれば<sup>(32)</sup>、ドレスデンでの彼の生活は、ある教授の家に住んで砲術学校等へ通うきわめて充実した快適なものであったと言う。その家には彼の他にも幾人かのロシア人留学生がおり、彼らと交友関係を結びながら見聞をひろめ、当時のヴォルテール主義者らしく医学にも興味を示して、解剖学教室へも通っていたという。

侍従幼年学校在籍のままロシアを離れたオレーニンは、1783年8月にドレスデンにあって幼年学校を卒業となり、砲兵連隊に大尉として登録された。この年オレーニンの侍従幼年学校在籍は10年となり、当時の軍の通例としての任官であった。

1785年5月、アレクセイ・オレーニンはドレスデンをあとにしてロシアへ帰還する。彼の留学終了に合わせて母がドレスデンにやって来て、共にペテルブルグへ帰って行ったのである。オレーニンはドレスデンの地に生涯感謝の念を抱いていた。老齢になっても娘アンナに対して、外国へ出

---

(30) Н. М. Карамзин, Письма русского путешественника. М., 1980, с. 88.

(31) Файбисович (2006, 39–40): Азадовский (1958, 162–163).

(32) Оленина (1999, 230).

た際には彼が多くのもをを負っているドレスデンに必ず寄って、かの地に敬意を表してくるようになっていたという<sup>(33)</sup>。

オレーニンは、しかし、ドイツ語を好きではなかった。ロシアに帰ってからは、自在に使えるにもかかわらず、どうしても必要な場合しかドイツ語を使うことはなかった。

## 5. 軍人オレーニン

オレーニンが軍籍に入ったのは1783年の夏であるが、実際の勤務となったのは1785年9月からである。この年、5月21日にはエカテリーナ二世により「ロシア貴族への自由と特権の許可状」が出されている。貴族たちは、ピョートル三世によって与えられた国家勤務からの自由と、領地や農奴という財産がエカテリーナ二世によって法的に保障されたことにより、雪崩を打ったように退役して領地へ帰っていたところである。

帰国後勤務が始まる9月11日までオレーニンはペテルブルグで旧友との繋がりを温めなおし、友人の広がりをつくった。旧友B・B・カプニストを通じてH・A・リヴォフと知り合い<sup>(34)</sup>、そのことで自然に、И・И・ヘムニツェル、A・C・ストログノフ、И・М・ムラヴィヨフ＝アポストルらの、デルジャーヴィン・サークルと近い関係に入っていた。当時、デルジャーヴィン・サークルの面々は各地にばらばらになっていたが、つながりは途絶えてなかったのである。

帰国翌年の1786年5月にはロシア・アカデミーに論文「ロシア古代軍事用語解釈」を提出して、アカデミー会員に選出された。

その10日後、22才のオレーニンは砲兵大尉に昇進している。これは順

---

(33) Оленина (1999, 231).

(34) 彼は建築家、造園家としても知られることから、プリューチノ邸宅の設計プランにも関わったとされている。H. A. Львов, Избранные сочинения. Вена и СПб., 1994, с. 390.

調なスタートではあるが、決して大貴族子弟が享受する破格特権的なものではなく、これ以降実戦と軍務上の功績を重ねて徐々に昇進してゆく。10年後の1795年3月に退役するときには、陸軍大佐（6等官）の官位を与えられた。

主としてプスコフ軍管区の竜騎兵連隊に所属し、騎馬砲兵隊を新たに編成することに務めた。1789年、1790年と対スウェーデンの戦争に従軍し、1790年のスウェーデンとの和平交渉の際にはグスタフ三世スウェーデン国王に親しく接し、バシキール人部下の馬上弓術を国王に披露している<sup>(35)</sup>。

1792年6月、オレーニンは幾多の困難を克服して、エリザヴェータ・マルコヴナ・ポルトラツカヤ（1768—1838）と結婚する。宮廷付合唱団設立者、M・Φ・ポルトラツキイの長女であった。オレーニンの軍勤務はまだ数年続くが、生涯の伴侶を得て、家庭を営み始め、彼の仕事は大きく文官の分野へと方向転換してゆく。そしてこのころから後にプリューチノとして結実する、別邸ウサージバへの欲求と構想が生まれてくるのである。

#### 参考文献

- Агамалян Л. Г. (2003) Русская усадьба в эмиграции. (Музей-усадьба «Приютино») Русская усадьба. Вып. 9 (25).
- Азадовский М. К. (1958) История русской фольклористики. Т. 1. М.
- Голубева О. Д. (1988) Хранители мудрости. М.
- Ее же (1995) М. А. Корф. СПб.
- Ее же (1997) А. Н. Оленин. СПб.
- Ефимова И. С. (2006) Семейная идиллия Олениных. Русская усадьба. Вып. 12 (28). М.
- Канн. П. Я. (1994) Прогулки по Петербургу. СПб.
- Ключевский В. О. (1983) А. Н. Оленин.—Неопубликованные произведения

---

(35) Файбисович (2006, 60).



- ния. М.
- Козлов В. П. (1999) Российская археология в конце XVIII-первой четверти XIX века. М.
- Корнилова А. В. (1990) Мир альбомного рисунка. Русская альбомная графика конца XVIII-первой половины XIX века. Л.
- Ливен Д. (2000) Аристократия в Европе. СПб.
- Лотман Ю. М. (1994) Беседы о русской культуре: Быт и традиции русского дворянства (XVIII-начало XIX века). СПб. (ユーリー・ミハイロヴィチ・ロートマン「ロシア貴族」桑野隆他訳, 1997年, 筑摩書房)
- Мартынов И. Ф. (1977) О библиотеке екатерининского пажка. Каталог книг Алексея Оленина, 1775 г. Памятники культуры. Ежегодник. 1977. М.
- Миронов Б. Н. (1999) Социальная история России периода Империи (XVIII-начало XX в.). В двух томах. Том 1. СПб.
- Мурашова Н. В., Мыслина Л. П. (2008) Дворянские усадьбы Санкт-Петербургской губернии. Всеволожский район. СПб.
- Оленина А. А. (1999) Дневник: Воспоминания. СПб.
- Перевушина Е. В. (2008) Усадьбы и дачи петербургской интеллигенции XVIII-начала XX века. СПб.
- Порай-Кошиц, Романович-Славятинский (2003) Порай-Кошиц И. История русского дворянства. СПб., 1900; Романов-Славятинский А. Дворянство в России. СПб., 1870.
- Приютино (2008) Приютино: Антология русской усадьбы. Составление и комментарии Л. Г. Агамалян и И. С. Ефимовой. СПб.
- Сотрудники (1995) Сотрудники Российской национальной библиотеки—деятели науки и культуры. Биографический словарь. Том 1. Императорская Публичная библиотека 1795-1977. СПб.
- Тимофеев Л. В. (1983) В кругу друзей и муз. Дом Оленина. Л.
- Его же (2004) От Парфения (Родословная Олениных). Памятники культуры. Ежегодник. 2003. М.
- Его же (2007) Приют, любовью муз согретый. СПб.
- Файбисович В. М. (2006) Алексей Николаевич Оленин. Опыт научной биографии. СПб.

- Шилов Д. Н. (2002) Государственные деятели Российской Империи. Главы высших и центральных учреждений, 1802–1917. СПб.
- Яковкина Н. И. (2002) Русское дворянство первой половины XIX века. Быт и традиции. СПб.
- Stuart Mary (1986) Aristocrat-Librarian in Service to the Tsar. Aleksei Nikolaevich Olenin and the Imperial Public Library. New York.